

НОВАЯ СОВЕТСКАЯ ЛИТЕРАТУРА

5

アクション・フー・パパ、なんて読むの？・安井侑子訳
一九四三年の給食・安井侑子訳
月への道なかば・江川卓訳
いかした警帽野郎・安井侑子訳

新しいソビエトの文学 5

アクション・フ	パパ、なんて読むの！	安井侑子訳
	一九四三年の給食	安井侑子訳
	月への道なかば	江川 卓訳
	いかした警帽野郎	安井侑子訳
	ジコイ	草鹿外吉訳
	いつでも売ります	安井侑子訳
グラジーリン	煙が眼にしみる	箕浦達二訳

発 行 1968. 5. 10

発行者 井 村 寿 二

発行所 勲 草 書 房 東京都千代田区神田駿河台2の3
(株式会社大和出版部) TEL 294-6121

定 価 580 円

印刷者 白井倉之助 東京都青梅市根ヶ布 385

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 精興社印刷・複製本
勲草分類 No. 8845

目次

ア ク シ ヨ ー ノ フ

パパ、なんて読むの！……………安井侑子訳

一九四三年の給食……………安井侑子訳

月への道なかば……………江川 卓訳

いかした警帽野郎……………安井侑子訳

ジコイ……………草鹿外吉訳

いつでも売ります……………安井侑子訳

グ ラ ジ ー リ ン

煙が眼にしみる……………箕浦達二訳

解説……………安井侑子
箕浦達二

339

209

105

76

53

31

20

3

アクションノフ

パパ、なんて読むの！

一九四三年の給食

月への道なかば

いかした警帽野郎

ジコイ

いつでも売ります（戯曲）

安井侑子訳

安井侑子訳

江川卓訳

安井侑子訳

草鹿外吉訳

安井侑子訳

ババ、なんて読むの！

明るい色のオーバーシャツをきた背の高い男が、かん照りのなかに立って、じっと空を見あげている。

『ウクライナホテル』の建物のそびえ立つ向こうに、暗い藍色の密雲が刻々たれこめていくあたりを。

『フィリ（ウクライナホテルの西方モスクワ郊外の新住宅地）』のほうじゃ、たぶんもう、どしゃぶりだな』と彼は思った。

フィリでは、きつと、いちめん泥ぬかるみだ。ブルドーザーで掘りかえされた地面を、人々は我がちに駆けだして、飯場小舎とか、木のかげとか、売店のひさしの下に雨を避ける。そこから白ロシア駅にむけて、雨に打たれた郊外電車が一台、また一台走ってくれば、いれ代わりに白ロシア駅からは、乾いた車が出て行って、どしゃぶりのなかに突っこんではそれを突きぬけ、走っていくのだ——ジャーヴォロンキヤ、ゴリーツイノヤ、ズヴェニ—ゴロドめぎして。あそこいらまで行くと、谷あいには小川が流れていて、雨に濡れた松がぶんと香ってくるし、丘のうえには、白い教会がいくつか立っているのが

見える。急に彼は、どこでもいいからたった今あのあたりに行きたい、オーリカを背広でくるみ両腕に抱きあげ、一目散に雨のなかを駆めがけて走っていきたい思いにかられた。

『ルージニキの競技場まで降ってきさえしなけりゃな』と彼は思った。

彼自身は、雨中ゲームがむしろ好きなほうだった。濡れたボールが、重たい砲丸のように、眼のまえに飛んでくる。こうなると冗談ごとじゃないし、ドリブルなどしている余裕もない。とにかくバスをまわし、確実にゲームを運ぶことで手一杯だ。まわりの連中はぐしょぬれの重たい身体で荒く息をついている。一瞬のゆとりもない張りつめた重労働。まるで『総員甲板へ』の号令のときそっくり……だが、観客席で見物する身となれば話は別、やはりのだやかな陽ざしをあびながら、新聞紙で日よけ帽子でも折るにこしたことはない。

ふと後ろをふりかえって、彼は呼んだ。

「オリガ！」

六つぐらいの少女が、大きな建物のかげで『石けり遊び』をしながら、びよんびよん跳ねていた。父の声をきくと彼女は駆けよってきて、その腕につかまった。しつけの良い子だった。二人は、夏場だけの屋外食堂のテントをくぐる。店の名もおあつらえむきに『夏』だ。男は

もう一度、雨雲をちらと見返った。

『うまくいけば、競技場はそれしてくれるぞ』、彼はひそかに思った。

「^ペcu」少女が云った、「^レpa' ^イi ^ネna' ^オo' ^セsa' ^イi ^テta' 軟
音符……」

壁の掲示を彼女は読みあげているのだ。

テントのしたも、どうみたって、外より暑かった。表の囲いちかく座っている客たちの顔はまっ赤に上気し、陽ざしを映していた。どの顔にも汗の玉がてかてか光っている。この暑さにみな湯気のたつスープをすすり、そのうえおまけに焼きたての串焼き肉が運ばれてくるとあっては、見るからにぞっとしない光景だ。

「㊦」少女はつづけた、「もう一つ、㊦、㊦……パパ、なんて読むの！」

パパは揭示に目をやる。『アルコール類の持ちこみ並びに飲酒を厳禁する』。

「なんて書いてあるの？」少女がたずねる。

「つまらないことさ」パパは苦笑する。

「だって、つまらないことを、活字体で書いたりする？」

彼女は首をかしげた。

「することもあるのさ」

彼は店の奥の日にけに友人たちが陣どっている一隅に進んでいった。連中は、冷えたビールを飲んでいた。少

女はならんでいく。髪の毛もブロードで、青いセラー服に、きちんとひだのついたプリーツスカート、おさげ髪にはナイロンのリボン、足には白いソックス、頭から足のさきまで、身ぎれいなよそゆきの恰好で、まさしく模範児童の見本だ。『この缶詰のおいしさは、お子さまがたもご存じです』、などとよくマイクロバスのボスターに描かれているあれだ。わりやり手を引っぱったりする必要もない。きよろきよろそ見などせず、ババのあとからおとなしくついてくる。

彼女のパパは、かつてはスポーツ選手でならし、近所
 一帯の三つの通りのアイドルだった。春の夕ぐれ、彼が
 トレーニングから戻ってくると、近辺の三つの通りの腕
 白どもが門のしたから這いだしてきては彼を出むかえ、
 若い娘たちはうっとりしたまなざしを彼に投げかける。
 もっとも手のつけられぬ「札つき連中」でさえ、恭々し
 くハンティングを持ちあげて敬意を表わしたし、フットボ
 ールなくして何の人生ぞやという退役陸軍中佐のコロメ
 イツエフ氏など、彼を呼びとめ、声をかけずにはいなか
 ったものだ。

「聞いとるぞ、ぐんぐん伸びてるそうだな、そのいきだ！」

一軍サブの彼は、彼のチームメンバー揃いの、グレーのハンチング「ブクレー」をかぶって、どこか籠（かご）のゆる

んだ一種独特のフットボール式足どりで歩いていく。なにも理由があつてそんな歩きかたが身についたわけじゃない。要するに疲れきっているだけなのだ。(わざとそんな歩きかたを真似してみせるのは、氣どつた連中のすることだ。)顔は屈託のない微笑にはこぼび、全身は、若さと、スポーツのあとの快い疲労感を謳歌している。

あれはまだオリガの生まれるまえのことだった。だから彼女は、むろん、そのことを知るよしもない。だが彼にしてみれば、この六年は、まるで六日も同然に、飛ぶように過ぎてしまったものだった。彼女が生まれたころには、もう彼の「伸び」は止まってしまっていたけれど、ブレイはまだ続けていた。夏はフットボール、冬はホッケー——それがすべてだった。やがてフィールドから補欠ベンチに移され、つづいて観客席へと交わりはしたが、相変わらず——夏はフットボール、冬はホッケー……夏のシーズンが六回と、冬のシーズンが六回……

彼は自問自答をつづける、『それがどうした？ なにが悪い？ シーズンオフの秋と春は——トレーニングの期間さ…… しかしまえには他に何がある？…… おつとどっこい、おれにはワイフがあるぜ…… ワイフ？ ああ、てっとり早く云えば、おまえのベッドに女がいるってことなんだろう？…… おれは妻がいると云ってるんだ。家族だよ、わかったか？ 妻と娘さ…… ほう、娘

もいるんだって！ 彼女の存在も思い出したってわけだな…… フットボール、ホッケー、ホッケー、フットボール…… でも飽きやしないかね？ ばか云え、スポーツに飽きるなんてことがあつてたまるか？…… それにおれには、工場の勤めだつてあるさ…… ジャーソちらはどうなんだ、飽きないかね？…… ストップ、工場内には他人は立ち入り禁止…… そう、しかたがない…… すると要するに、工場にフットボール、だな？ それにワイフと、娘？ それがどうした？ おれは家族の生活は保障してるぜ、月に百五十と、割まし手当もつく…… ついでだが、おれは生産合理化員だしな。友だちだって、ついでに云々とくが、山ほどいるぜ。ほら、みなそこに座っているだろう、ベーチカ・ストルコフにイリダール、ヴラジック、ジェーレンチカ、イーゴリ、ジャームカ、もう一人のベーチカ——勢ぞろいだ。テーブルを二つ合わせて、ざりがにの殻をそこに散らばし、もうビールをこぼして水たまりもこさえちまっている。粒よりの顔ぶれさ。誰もが同い年。というと、いくつだい？ 残らずが、二九年生まれ、つまり、当年として三十二歳さ。『セリョーガ、それ、きみのとこのちびさんかい？』二人目のベーチカがたずねた。

「ああ」

彼はさしだされた椅子に腰をおろし、少女を膝に抱き

あげた。あまり座りごころはよくなかったのだけれど、彼女はおとなしくしていた。

「おとなしくしてるんだよ、オリューシ、すぐにチヨコレートがもらえるからね」

ビールのジョッキとざりがにを盛った皿が彼のまえに置かれ、少女のために彼はレモネードとばら売りの「おたのしみ」チヨコレートを二百グラム注文した。友人たちは絶大な好奇心をもって彼を眺めていた。娘をつれた彼を見るのは初めてだったのだ。

「実はさ、アールカが今日、会議なんだ」ペーチカ・ストルコフに彼は説明した。

「日曜日にかい？」イーゴリが驚いて云った。

「年がら年じゅう会議さ、死神の助手たちのところでは」セルゲイは苦笑いしてから、ちょっぴり云いわけがましくつけ加えた。「おふくろさんは、お客に出かけちゃったし、というわけで仕方なしさ……」

彼は少女の頭を目で指した。髪の毛はまんなかでまっすぐ分け目がつけられていた。

セルゲイはジョッキを持ちあげると、目でひと渡りみなを見まわし、首をちょっとかしげ、こみあげてくるほどのぼのした思いを隠すように、にやりとした。彼はこの仲間たちを、その一人一人を好いていたし、また彼らのほうでも彼を好いていることを知っていた。連中は彼の

ことをなんとか特別に愛していた。というのも、おそらくは彼がむかし仲間うちでも一番の「成長株」で、目に見えて進歩し、一軍のサブとしてブレイするほどだったからだろう。彼はめぐまれた体軀を持ち、馬力も強く、フィールドをよく見つけた。そして、当然ながら、仲間のガールフレンドのうち一番美しい娘を射とめて結婚した。

セルゲイは自分の友人たちと離れることがなかった。彼らといるときだけ、六年まえの自分を感じることが彼にはできた。彼らはみなしっかりと互いに支えあい、他人がそこにはいりこむ隙はなかった。内密の保証で結ばれたもの同志のように、ごく限られた仲間うちで、彼らは自分らの青春時代の趣味や習慣を保ちつづけ、もう過去となった時の一断片を目に見えぬ未来へと引きずっていくとする……フォワードもバックスもやがては結婚し、予備軍に退き、熱狂的ファンに移っていき、やがて子供が生まれてくる。だが子供も、妻も、日常生活すべても、あの男らしいモスクワの毎日とは、目に見えぬ一線でへだてられた、どこかの存在でしかなかった。遅れてきたファンたちが、メトロからスタジアムにまるでアタックよろしく突進し、観客席はもはや興奮の渦、そして誰しもがとてつもなく大きなあの春の宵の連帯感に包まれ酔いしれたようになるあのモスクワの毎日とは。

彼らには理解ができなかった。どうしてあの娘たち（彼らの熱烈なファンであり、ダンスの相手であった娘たち）が、今のようなうんざりする俗物になってしまったのかを。今では彼らは、職場チームでボールを蹴りながら、ビールをまねに、かつて彼らが全工場選抜チームでプレイしていたころの事、そして誰彼が一軍に勧誘されたりしたあの時代のことを思い出すのだった。セリョーガはとうに一軍サブに数えられ、もう一息でレギュラーメンバーにはいれるところだった。そう、もしアールカさえいなかったら。みなあいつらのせいなのだ——アールカ、ニンカ、タマルカ、俗物たちの……

「ババ、ざりがにさんの頭、むしっちゃ駄目」少女が云った。

セルゲイはわれに返ると、注意深く彼を見つめているきびしい青い眼を、アールカそっくりのその眼を見やった。まっ赤な伊達者のざりがにを持った手を、彼はおろした。この青い眼だ、注意深く、きびしく見つめている青い眼。八年まえ、それが彼の足をとめたのだ。『今は駄目、素面しずめで出なおしていらっしやい』。あの眼ざし。もちろん仲間たちといっしょに、いかに『ばあさん』には愛想がつきたか駄だ弁べんりあうことはできる、いや、ひょっとすると、本当におれは彼女に飽きたのかな、だってまさかまさかと思っていながら、突然、なんとなしに、四

○年生まれのびちびちした女の子、水泳選手でなければ体操選手みたいな子と知りあってみたい欲望にかられるものだ。そして事実、知りあうことだってある。でもあの眼ざしが……

「ざりがにさんの足もひっぱっちゃ駄目」

「どうして？」彼はあの時と同じように当惑して、つぶやいた。

「だってざりがにさん、生きてるみたいだもん」

彼はざりがにをテーブルにおいた。

「じゃどうすればいいんだい？」

「あたしにちょうだい」

オーリヤはざりがにをつかむと、自分のハンカチにくるんだ。

まわりで友人たちがどっと笑った。

「こりや愉快なちびさんだぜ、セルゲイ！ こいつはいい！」

「オーレンカ、ざりがにに好きかい？」ジャームカが聞いた。彼には子供がいなかった。

「うん」少女は云った。「ざりがににさん、お尻で歩くもん」「アーハーハ！ アーハーハ！」隣りのテーブルでもみな腹をかかえて苦しがった。「こいつは上出来だ！ まったくな！」

「おい、いいかげんに、静まらないか！」ペーチカ・ス

トルコフが叫んだので、隣のテールはなりをひそめた。イリダールがチャンピオン戦の成績表をとりだして、テールのうえにひろげたので、みなはそのうえにかがみこみ、あるチームについてあれこれ詮策をはじめた。そのチームこそ、彼らの目算では、当然首位を争っているはずなのに、なぜだか中位あたりでもたついていた。彼らはそのチームを応援していたが、そのやりかたは決して、よくわかりもしない熱狂的ファンがなんとも不可解な理由をたてにひいきチームを選ぶのとは全く違っていた。彼らのチーム——それこそはまさに大文字で書きはじめるに価するチーム、つまり彼らの意見によれば、これこそ「フットボールチーム」という名譽ある概念にもっともよくあてはまるものだった。観客席でも彼らは、足を踏みならしたり、口笛を吹いたり、ミスがあれば『ウォッカの飲みすぎだぞ!』などとどなったりはしない。なぜなら彼らは、そういう事がまま起こりうるのを知っているからだ。だって第一級のゴールキーパーの誰をとったって、「へま」をやらぬとは限らない。ボールは丸いものだし、チームは——機械じゃない。十一人の様々な人間なのだ。

突然、ま昼の白熱に照りつけられた往来から、明るい色の背広に黒っぽいネクタイの男が食堂にはいってきいた。ヴァチュスラフ・ソロキンだった。一同は騒々し

く彼を迎えた。

「やあ、スラーヴァ!」

「スラーヴァ、おかえり!」

「で、レニングラードはどうだった、スラーヴァ?」

「博物館の街さ」ソロキンは手短かく答えると、みなの手を一人残さず握手してまわった。

「こんちわ、オリュシ!」彼はセルゲイの娘に云い、握手した。

「こんにちわ、ヴァーチャおじさん!」彼女は云った。

『どうして知ってるのだろう?』セルゲイは考えた。

『それに、ヴァーチャなんて呼んでいる』

ソロキンにもビールが注がれた。飲みながら彼は、経験交換の代表団の一員として同系企業の訪問に行ってきたレニングラードのことを話した。

「驚くべき建築のアンサンブルだなあ、ラストレリ、ロツシ、カザコフ、クワレングなんかの作ったものは……」

口早に彼は数えあげた。

『あちらでもはやばやと学を磨いてきたな』セルゲイは思った。

彼も一軍サブの時代に、レニングラードには行ったことがあった。けれど当時の彼は厳格な節制のもとに厳しく自分をセーブしていたから、誰ひとりとも知りあうひまさえなかったほどだ。

「……ドリーヤ式、円錐式、ゴチック式、カリフォルニア式円柱……」ソローキンは並べたてた。

「まいった、まいった……」セルゲイが云ったので、みな笑いだした。

ソローキンは気にさわらなかつたふりをした。彼はひとなどでテーブルからざりがにの殻を払い落とすと、成績表のほうに椅子を引きよせた。ジェーンカから煙草の火をもらうと、彼の見るところでは今日の試合は負けだろう、と云った。

「勝つさ」セルゲイが云った。

「いや違ふたら、セリョージャ」やんわりと彼は云い、セルゲイの眼を見つめた。「今日は彼ら、勝ち目はな

い。試合の法則とか、理論とか、目算とかがあつて……」

「きみはゲームの事なんか、てんでわかつてないんだ、ヴァーチャ」セルゲイは冷たくせせら笑った。

「ぼくがわかつてないって？」たちまちソローキンもむきになった。「ぼくは本を読んですすよ！」

「本！ みんな、聞いたかい、われらのヴァーチャは本を読んでもとさ！ 立派なもんさね、われらのヴァーチャは」

ソローキンはすぐに冷静さをとりもどし、やわらかくまばらな髪をそつとまであげた。それからセルゲイにむかつて、いかにも哀れむように彼は微笑んでみせた。

『そう、ぼくはヴァーチャと呼ばれるのは嫌いなんだ』彼の微笑はそう云っているように見えた。『だがそう呼ぶのはきみ一人だけだぜ、セルゲイ。きみのお望みのようにはならんさ。みなはぼくをヴァーチャと呼んだりはしない。今までもおりスラーヴァとか、スラーヴィックとか呼ぶさ。なるほど、セルゲイ、たしかにきみは一軍のサブだった、だが今じゃもう違ふんだ。なるほど、きみはぼくらのガールフレンドのうち一番の美人と結婚した、だが……』

セルゲイも自分を抑えた。

『おちつくんだ』彼は思った。『何と云つたって友だちには違ひないんだからな』

彼は頭をあげる。防水布張りのテントは、まるで誰か丸々と太った人間がうえに寝ころび、寝がえりをうっているみたいに揺れていた。食堂のなかはもうぎっしり満員だった。隣のテーブルに座つた八つはぎのハンチングの浅黒い顔の男が、重たげにビールジョッキをテーブルに置くと、ハンチングを後ろにずらし、誰にともなく語りだした。

『おれはよそもんさ、わかつたかい？ ここのもんじゃないんだ。女がこのモスクワにいるんだよ、彼女がさ…… 早いやあ——同棲してゐるんだ。それだけのことよ！』

彼は拳骨でテーブルを叩くと、ハンチングを目深にかぶりなおし黙りこんだ。おそろく半永久的にそうしているんだろう。

セルゲイは額の汗をぬぐった——我慢できぬほどここは暑くなってきた。ソローキンがテーブルからのりだすようにして、彼に囁いた。

「セリョージャ、子供を外にだしてやれよ。往来で遊ばせとけばいい」

「きみが心配することはないさ」セルゲイは囁きかえした。

ソローキンは背をうしろに引き、もう一度憐れむような微笑を顔に浮かべた。それから彼は立ちあがると、背広を引っぱって身なりをととのえた。

「すまないけど、みんな、失敬するよ」

「競技場には来るかい？」ペーチカがたずねた。

「残念ながら行けないんだ。勉強しなくちゃならないんでね」

「日曜にかい？」イーゴリがまた驚いた。

「仕方ないさ、試験が目と鼻のさきでね」

「今度は何年生の試験だい、スラーフカ」ジェーニチカがたずねた。

「三年のだよ」ソローキンは答えた。「じゃ失敬」彼は云った。「元気でな！」彼は両手で握手する合図をした。

「オリュシ、いい子にしろよ！」微笑みかけて彼は、チヨコレートを少女にさしだした。

「おい待てよ」ジャームカが声をかけた。「おれたちも行くよ。ここは暑くなってきたからな」

みなは立ち上り、一団となって炎天下の往来へ出た。アスファルトはプラスチックの絨毯みたいに足のしたで弾んだ。雨雲は以前のままだった。さっきと同じように高い建物の向こうに黒くただよっている。

「きみは競技場に行くのかい？」和解するように、ソローキンがセルゲイにたずねた。

「あたりまえさ、こんなフットボールをおれが見逃すでも思ってるのかい？」

「何も思っちゃいないさ」疲れたようにソローキンは云った。

「そんならそれで、黙っていろ」

ソローキンは通りを駆け足で横ぎり、バスにとびのった。残った一同は陰になっている側をゆっくり歩いていきながら、静かに話したり、笑ったりしていた。普段だとみな口々に騒ぎたて、ジャームカは一口話でも話してきかせ、イリダールはギターを弾きながら行くのだが、今日は年のいかぬ少女がいっしょにいるために、彼らはどう振るまっていいいのか戸惑っていた。

「でどこへ行くんだい？」セルゲイが聞いた。

「ぶらぶらスタジアムのほうへ行こうじゃないか」イーゴリが云った。「途中で小競技場のバスケットボールをついでにのぞくか、女子の準決勝をやっているから。」

「パパ、ちょっとお話があるんだけど？」オーリヤが云った。

セルゲイは、彼女がまるで大人そっくりな口をきくのに驚いて、立ちどまった。友人たちはさきに進んでいった。

「わたしたち、公園に行くんじゃないの？」少女は云った。

「競技場スタジアムに行くんだよ。あそこだって公園と同じだ。ほら、林もあるし、売店だって……」

「でも回転木馬もある？」

「いや、木馬はないよ、でもその代わり……」

「あたし、公園のほうがいい」

「おまえは間違ってるよ、オリガ」自分を抑えながら、セルゲイは云った。

「あのおじさんたちと行くのはいいや」彼女はすっかり冠りをまげた。

「おまえは間違ってるよ」手をやいて彼はくり返した。

「ママが回転木馬に乗せてくれるって約束したもん」

「じゃママに乗せてもらえばいいだろう」いらいらしてセルゲイは云うと、振りかえって見た。

みなは曲り角で立ち止っている。

オーリヤの顔がみるみる皺くちやになった。

「ママのせいじゃないわ、会議があったって」

「みんな！」セルゲイは叫んだ。「さきに行つてくれ！ 試合までには行くよ……」彼はオーリヤの手を掴み、ぐいと引っぱった。「さっさと歩くんた」

『会議、会議』歩きながら彼は考えた。『永久にこの会議だ。まったく楽しい日曜日さ！ これでアールカが博士候補になってでもみる、尚さらことだぞ。用心しろよ。今でさえ彼女は、おまえの価値なんかこれっぽっちも認めてないんだからな』

彼は足早にさっさと歩いた。少女のほうは、遅れまいとして隣りを駆けていた。右の手に彼女は、ハンカチにくるんだざりがにを握っていた。小さなこぶしから、まるで豆トランジスターのアンテナよろしく、ざりがにのひげが覗いている。彼女はうきうきと走りながら、目にはいる文字を声をあげて読んでいた。

「Fe, Be, P, He, H……、パーバ！」

「布地！」トカミ 齒のあいだからセルゲイは云いすてた。

「肉！」ガランツレリヤ 小間物！」

『博士候補と、元フットボール選手の敗残者か。その名前前なんぞ、観客席のいちばん古狸が覚えてるぐらいがおちさ。十万人のうちの百人もいいとこだ。』そうーそ

う、いたっけな、そんなのが、ふむ、覚えてるよ、すぐ駄目になったがな……』だがいったい誰の罪なのだ、彼が、ネットーのようになれなかった、あのときシリヤに行かなかったのは、そして、彼が……博士候補、才女、美人……まったくだとも、べっぴんさん……彼女には、彼と話すことなど何ひとつないのだ。たしかに夜のあいだだけは共通の言葉が存在するが、昼は誰か他の男と話してればいいんだ、例えばあのヴァーチャとでも。彼なら、クワレンギとか、他の連中もろもろとか、あの様々な円柱のことだとか——たちどころによどみなく数えあげてくれるだろうて。おまえは三十代をひきかえにしたのだ。おや、また始まったな、お説教が？ 今おまえは、三十代を無駄にすごしている。いったい何のためにだ？ ほっといてくれ！ スポーツが終わり、愛も終わらんとするか……なに、愛だど！ おれにはわけないんだぞ、四〇年生まれのびちびちした女の子、水泳選手の娘でも見つかるぐらい……おれが云ってるのは、そんなことじゃない。ほっといてくれ！ いいか、おれをほっといてくれたら！」

公園で二人は、回転木馬に乗り、青い斑点におおわれた二頭の灰色の馬に並んでまたがった。セルゲイは娘を掴んでいた。彼女は甲高く笑いこらげ、ざりがにを木馬の耳のあいだにのつけた。

「ざりがににさんもお馬に乗ってる！」頭をそっくり返らせて、彼女は叫んだ。

セルゲイはむっつりした顔で微笑した。突然彼は、工場の工芸技術主任の姿を見つけた。主任は男の子の手を引いて、回転木馬の順番を待っていた。彼はセルゲイに目礼し帽子をちよっとあげた。脂肪ぶとりした退屈な主任と同じであることが、セルゲイを不快にした。

「娘さんですか？」主任が叫んだ。

「行李はぎっしりいっぱい、更紗もあれば、錦もあるよ……」
(ロシア民謡「行商人のうた」)

「坊っちゃん？」次の一周目にセルゲイは叫んだ。

「愛しんでおくれ、可愛い人よ、若者の……」主任は何度かうなずいた。

「……肩を！」

「そうーそう、息子ですよ！」主任は叫んだ。

『つまらないレコードをかけてやがる！ いや、だがあれでもいい男なんだな、主任のやつ』

オーリヤは長いこと回転木馬の快適な旋回を忘れられなかった。

「パーバ、パーバ、ママに話しましょうね。ざりがにさんがお馬に乗ったこと？」

「ねえ、オリガ、どうしてヴァーチャおじさんを知ってるんだい？」我ながら唐突に、セルゲイはたずねた。

「ママといっしょにお仕事に出かける途中、よく逢うのよ。とっても愉快なおじさん。」

『へえ、こいつは初耳だ。やつが愉快な、だって』セルゲイは思った。『ヴァーチャがひょうきん者。つまりあいつ、またボーズをとりはじめたってわけだ。待ってろよ、今におれも勘忍袋の緒をきらすからな』

彼はオリガをベンチに残し、公衆電話のボックスに入ると、その賢明なる会議とやらが行なわれている大学の番号をまわしはじめた。彼は会議がすでに終わっていることを願った。そうすれば娘を家に送りとどけてアールカに渡し、自分は競技場^{スタジアム}に出かけて、一晚じゅう仲間たちと過ごせる。

長いこと受話器にブザーの音が唸りつづけたのち、やっとそれが途切れ、年よりらしい声が云った。

「もしもし？」

「あんたのとこの七面倒くさい会議は終わったかね？」セルゲイはたずねた。

「いったい何の会議かね？」受話器はむにゃむにゃ云った。「今日は日曜で……」

「そちら大学だろう？」セルゲイはどなった。

「そうですがね」

セルゲイはボックスを出た。空気は熱で溶けたみたい、たち昇っていた。並木道を、汗びっしょりの太った

男が袖の広い絹の「水玉」シャツをきて歩いていった。彼はもの頼そうに蠅を追いはらっている。蠅はしつこく彼のあとを追いつ、その頭上をとびまわっていた。いかにも彼が気にいったとみえる。

『さてと』セルゲイは思索した。と突然、背をひと突きされたような思いがけない恐怖で、彼の両脚はがくりとした。もう少して彼は公園から走りだしかけたが、オリガのことを思いだした。彼女は日かけのベンチに座って、ざりがにを歩かせていた。

「とっても喧嘩好きのざりがにさんだって、ざりがにさんだって、後ずさりして、おひげをもじゃもじゃさせる」彼女は一人で喋っていた。

『頭のいい子だ』セルゲイは思った。『ママに似てな』彼は少女の手を掴み、引っぱっていった。彼女は大声をあげながら、ざりがにを彼に見せる。

「パパ、ざりがにさん、すごく賢いの、ほんとに生きてるみたいよ！」

セルゲイは立ちどまると、ざりがにを手から引たくってまっ二つにへし折り、茂みに投げすてた。

「ざりがにには遊ぶためじゃない」彼は云った。「食べるもんだ。ビールのつまみに」

少女はたちまち涙をどっと溢らせて泣きだし、歩くのを拒んだ。彼は少女を両手に抱えあげ駆けだした。